

## 学位論文の要旨

### 社会的排斥からの回復に関する研究 —注意の向きと感情調整に着目した検討—

広島大学大学院総合科学研究科  
総合科学専攻  
伊崎 翼

本論文では、仲間はずれ経験である、社会的排斥からの回復について、所属に関する事象への注意配分に着目して検討を行った。全7章における検討を通して、受容経験による排斥からの回復が生じる際の中枢メカニズムのモデル構築と、回復を促す方略の提案を目的とした。

第1章では、研究の背景について概説し、各章で行う検討の目的について説明した。本研究では、中枢メカニズムや回復を促す方略について検討を行うため、受容手がかり（他者からの受容を予期させる刺激）と、排斥手がかり（他者からの排斥を予期させる刺激）に対する注意配分を測定した。各手がかりに対する注意は、刺激に対して配分された注意の程度を反映する事象関連電位である、P3bを用いて測定した。

第2章では、受容経験による排斥からの回復に影響を及ぼす個人特性について検討した。その結果、特性自尊心の影響が示され、排斥経験後の注意配分の程度は、特性自尊心の高低で異なる可能性が示された。第3章では、受容経験による排斥からの回復と、受容手がかりに対する注意配分との関連について検討した。その結果、回復の程度は受容経験時における受容手がかりに対する注意配分と正の関連を示し、また特性自尊心低群は高群よりも回復の程度が小さく、受容手がかりに対して配分された注意も小さいことが示された。第4章では、受容経験による排斥からの回復と、排斥手がかりに対する注意配分との関連について検討した。その結果、特性自尊心低群では、高群と比べて、排斥経験後に排斥手がかりに対して配分された注意は小さいことが示された。第5章では、受容経験による排斥からの回復を促す方略について検討した。その結果、受容経験による排斥からの回復が生じにくい特性自尊心低群では、受容手がかりに対して注意を促すことで、排斥からの回復は増大することが示された。第6章では、ネガティブ刺激に対する評価や刺激呈示後の感情が、注意の向き（拡大・縮小）によって変化を示すか検討した。その結果、注意の向きを拡げることによって、ネガティブ刺激に対する見方が変化し、刺激により生じるネガティブ感情は抑制される可能性が示された。

第7章では、これまでの研究結果をまとめ、受容経験による排斥からの回復および、注意の向きと感情との関連について、総合考察を行った。本研究結果より、排斥からの回復が生

じる際の中枢メカニズムとして、受容手がかりを認知する段階 (P3b) が回復の程度に関与している可能性が示された。受容手がかりを認知し、他者から受容されたと判断できるかどうかにより、主観的な回復が変化を示すことが考えられる。また注意の向きが周囲へと拡がり、受容手がかりや排斥手がかりに対して適切に注意が配分されるようになることで、排斥からの回復が促進される可能性が示唆された。今後はこれらの知見をもとに、受容経験による排斥からの回復を現実場面での介入に繋げることが期待される。